

旧秋元別邸

館^{たてばやし} 林^{すん}に長く住んでいる人たちから、「秋元様^{さま}」と親しみをこめてよばれているのが、この「旧秋元別邸^{きゅう べつてい}」です。

この建^{たてもの}物^{もの}は、明治末期^{めいじまつき}に建てられ^{たてられ}、秋元興朝^{おきとも}とその子春朝^{はるとも}が別邸^{べつてい}として使用^{しよう}した旧館^{きゅう たてばやし}林藩主^{はんしゅ}秋元家^{あきもと}に係^{かかわり}わりの深い建^{ふかい たてもの}物^{もの}です。

この建^{たてもの}物^{もの}の面^{おも}白^{しろ}いところ^いは、右側^{みぎがわ}が和風^{わふう}の建^{けんちく}築^{ちく}、左側^{ひだりがわ}が洋風^{ようふう}の建^{けんちく}築^{ちく}となっ^なっていること^{こと}です。洋風^{ようふう}の部分^{ぶぶん}は昭和初期^{しやうわ しよき}に東京^{とうきやう}の秋元本邸^{ほんてい}から移築^{いぢく}されたのだとか。

この建^{たてもの}物^{もの}は、最近^{さいきん}「ぐんまフィルムコミッション^{とうろく}」に登^{いこう}録^{なんどか}され、2024年以降^{しやう}、何度^{なんど}かロケ地^{しやう}として使用^{しよう}されています。また、「おしよくじどころ^{きゅう べつてい}食事^{しきじ}処^{じょ} 旧秋元別邸^{きゅう べつてい}」として、室内^{しやう}から庭園^{ていえん}を眺めながらお食^{な がめ}事^{な がら}ができるという企^き画^{かく}も期^き間^{かん}限^{げんてい}定^{てい}で行^{たい}わ^{たい}れているよう^{よう}です。そ^そのほ^ほか、様^{さま}々^{ざま}なイベ^{たい}ント^{てい}でこの建^{たてもの}物^{もの}や庭^{ていえん}園^{えん}が利用^{りよう}されています。春^ははつ^つつ^つじ、初夏^ははショ^ウウ^ウブ、秋^{あき}はヒガ^ンバ^ナ、冬^{ふゆ}は寒^{かん}桜^{えい}がさくのも見^みどころ^{どころ}です。



↑ 洋風建築部分



↑ 和風建築部分



秋のひがん花



初夏のハナショウブ

ところで、秋元様って、どんな人？

右の銅像は、秋元春朝さんです。投網をして魚を獲っている様子が表現されています。この方は自然を愛する人物で当時の人々からとても好かれていたそうです。

秋元様は、江戸時代の末期、1845年に秋元志朝が館林藩主になったのが、館林との関わりのスタート。

秋元は、館林藩の改革に努めただけでなく、徳川家と天皇家の調整役を務めていた。また、館林領内の農民が水害や干害で苦しんでいたのを知ると、年貢の取り立て方を変えるなどして村人のための政治を行いました。さらに、1856年に大水害が起こった時には、救済活動もしてくれました。そのため、領内赤生田村民から、お礼の気持ちをこめて、「生祠秋元宮」としておまつりされ、生き神様として尊敬されました。

その子秋元礼朝は、明治維新の時に、江戸幕府を支える大事な大名家であるにもかかわらず、館林を守るため、明治政府軍に味方することを決意した人物です。福島県の会津城攻めにも館林軍は加わったんですよ。

秋元家は、秋元家に伝わる書物を館林の文化の発展のために寄付し、館林市立図書館の前身である「秋元文庫」の設立に関わりました。

